

## 自己中心的で協調性の乏しい生徒の指導事例

小林 映 雄\*

自分の思いどおりにならないことがあるとすぐに他を非難し、反発的な態度をとる生徒がいる。そのために周囲から敬遠されて、集団からはみ出した存在になってしまう。その結果として、いっそう集団に対する反発が強まっていく。このような生徒について、精神的な安定を図り、社会性の発達を促したいと思いながら、学級担任として触れ合ってきた一年間を、この機会にふり返ってみた記録である。

### I 目的

わがままで攻撃的な行動が多く、周囲から敬遠されている生徒について、相談的な態度で接することによって社会性の発達を促したい。

### II 生徒の状況

1 対象生徒 中学3年生男子 Y

#### 2 問題の概要

小学校時代の所見によると「元気がよいが根気が続かない。わがままをおさえられず、他人に不愉快な気分を与えることが多い。」とある。本人の語るところによると、小学校4年生のころ家出をしかけたことがあるが、はっきりとは原因を記憶していないということである。

中学生になってからの行動の傾向をしては、次のようなことがとり上げられる。

- (1) 周囲の者に対する攻撃的な態度が多く、自省的な態度が乏しい。
- (2) 不平・不満が多い。
- (3) 集団のきまりや調和について、無視したり、反抗的な態度をとる。
- (4) 学習態度が投げやりである。

#### 3 家庭の環境

父(48才)、母(45才)、姉(高校3年)、弟(小学校6年)と本人の5人家族。父は建築関係の仕事をしており、子どもをかわいがるが気性の激しいところがある。母は楽天的な性格で子どものしつけについては、あまり細かいことは言わない。父は子どものころ、家庭の事情で学校にも思うように行けないことが多かったということで、Yについては自由にさせてやりたいという気持ちと、期待をかなり強く持っているようである。

\* 南魚沼郡大和町立大和中学校

4 諸検査の記録

(1) 知能検査(昭和51年8月)

教研式 SS 46

(2) 学業成績 (表1) 3年1学期の学業成績(10段階)

科目	国	社	数	理	音	美	体	技	英
段階	3	4	2	2	3	3	3	3	3

(3) Y-G性格検査

E系統値 9  
C系統値 3  
A系統値 2  
B系統値 7  
D系統値 1

判定 E型(不安定不適応消極型)

かなり極端な左下がり型のプロフィールであり、不満性や攻撃性、空想性などが強く表われている点は日常の観察においてもよく認められるが、内向的傾向は上記のような性向のかけにかくれて見落しがちである。

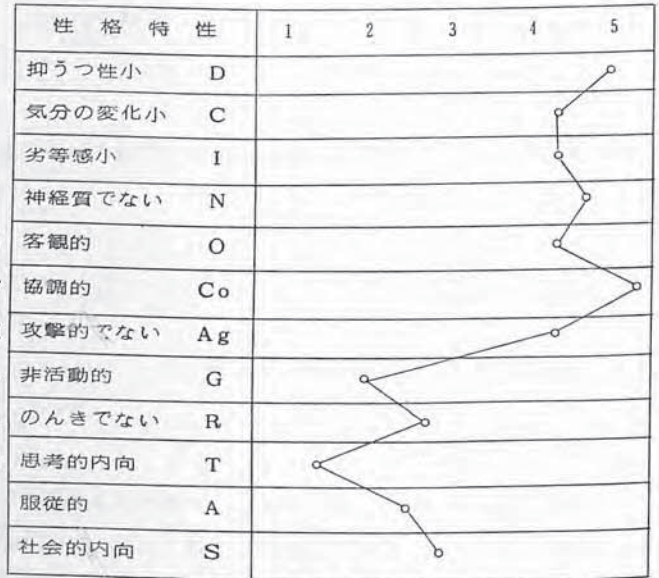


図1 YG性格検査プロフィール

Ⅲ 実践の経過と結果

1 出合いのころ(2年1学期)

はじめて現在の学級の担任になったころ、わたしはカウンセリングについては何の知識もなく、したがって、ほとんど関心も持っていない状態であった。

Yは、服装も規制に合わせようとせず、清掃などもほとんどやらなかった。そのくせに級友や教師の小さな欠点については自分なりの理屈を言って非難したり、事ごとに不平を言うことが多かった。そのために、学級の生徒たちは、Yに対しては当たらずさわらずに自分勝手にさせておくような状態が見られた。わたしは、Yのわがままな行動に対してはもっと厳しくしつけるのがよいと思った。

そのころ毎日のようにくり返されたYとの問答は、おおよそ次のようなものであった。

T 雑布はどうした。  
Y 机のところに掛けてあるよ。  
T どうして、そうじをしないんだ。  
Y いやんなるなあ。これからしょうとしてい

るのに。だいたい、さぼっているのはおればかりじゃないよ。Nだって、Sだって……。  
T いいから雑布を持って来なさい。  
Y あれおれの雑布がないぞ。N、おれの雑布

使ってなくしたな。

N ちゃんと返したじゃないか。あんなの一月も前の話だぞ。

Y 一か月だと……。なんだ，先生が来ると急にそうじのまねなんかして。

T なくしたんならまた持ってくるんだな。いいか，あす忘れずに持って来るんだぞ。

Y あ～あ，おもしろくねえな。なんだっておれたちがそうじしなければならんのかなあ。そうじ屋を頼めばいいんだよ。

こんなことをくり返しているうちに，わたしとYの間には，叱るものと叱られるもの，という役割りがいつの間にかできあがってしまった。1学期の終わりになってもYの行動はあい変わらずであり，わたしに叱られるのも苦にもしなくなった。わたしも，このようなYの行動は外からするしつけや指導では効果が上がらないのではないかと考えるようになった。

## 2 相談的なかかわり合い（2年生2学期）

2学期になって，学級内の班の編成替えをしたとき，Yのいる班の班長になった生徒から訴えがあった。班をまとめていく自信がないので班長をやめたいと言うのである。わたしは班長に，Yを特別あつかいしないこと，Yの言いなりになる必要はないがYの言い分を聞いてやって欲しいこと，彼の行動の責任は班長がとる必要はないこと，などを話し，班長も納得した。

この時，わたしや学級の生徒とYとのかかわり合いをふり返ってみて，もっとも欠けていたのは相談的なかかわりあいではなかったかという疑問を持った。自信があったわけではないが，受容的な態度で接し，相談的な関係を育てることによって事態は変わってくるのではないかと考え，とりあえず次のような方針を考えてみた。

- (1) 叱らないこと。
- (2) ことばや行動を率直に受けとめて，Yの気持ちを理解しようとする。
- (3) 機会をみつけて相談すること。

ここで最初にぶつかった問題は，お互いの人間関係を変えるということは，よほど劇的な事件でもないかぎり，たいへん難しいということであった。そのほかに，わたし自身の変容の困難なこともあり，他の生徒への配慮もあって，ある時期には，かえってお互いの関係が不安定なものになったように感じられた。それまでは“けんか友達”といったような一種の親近感のようなものがあったのだが，Yと会っても自然なことばが出てこなくなってしまった。廊下で出会ったときなど，ことばはかわさなくともニヤッと笑って通り過ぎたYが，うつむいて通るようになったりした。おりをみて話しかけても，お互いに表面的な感じで，記憶に残るような会話もないような状態がしばらく続いた。

このような状態が一か月ほど続いたあとではじめての呼び出しの相談を行なった。

時間は放課後の約50分間。場所は国語の研修室。

廊下で出会って，少し話をしようときそった。

T ここは，わりあい静かで落ちつけるだろう。

Y はあ。おれ，ここにはいるのは初めてだなあ。

T ここへ座ろうか。

Y 先生、何の話ですか。

T 特別な用はないんだけどね。きょうは時間もあるし、たまにはゆっくり話したいと思ったんだ。

Y ふーん。説教……、いや、叱られるんじゃないんですか。

T 叱られると思った？

Y うーん。このごろあまり叱られなかったし……。

T それで、もうそろそろ来そうなころだと……。

Y そうそう、もう来そうなころだと思った。

T このごろの心境はどうか。

Y うん。どうってこともないけど……。

頭のことだけだし、なんだってあんなにうるさく言わなければならないのかなあ。おれの考へでは、頭髪のことなんか個人の自由だと思うんだけどなあ。

T うん。それは……。

Y 頭髪なんかさ、短くしたって頭が良くなるわけじゃないし、運動するのにいいって言うけど、オリンピックの選手だって髪を長くしているだろう。髪を短くしなければならぬ理由なんか無いと思う。髪を短くしてさえいればいい子だという理由はないだろう。

T うん。

続いてYはバイクの話をした。いつかバイクに乗って日本一周をするのが夢だといい、夜、眠る前にはいつもそのことを空想するのだという。そのためにはできるだけ自由な職業につきたいが、家業を継がなければならないとも思うこと。最後に進路のことに触れた。進学のことを考えると非常に不安でゆううつな気持ちになるので、できるだけ進学のことを考えないようにしているが、しじゅう気にかかっていることを、やや重い口調で話した。

この相談について、まずわたし自身のことを考えてみると、相談中は夢中の状態で、一方的に相手に引きまわされていたような感じであった。また、はじめのうちは学級担任としての意識が浮かび上がって、Yの気持ちをすなおに受容し、反映することがほとんどできなかったようにも思えた。しかし、相談が終ろうとしたときYが「こんなに思っていることを全部話したことは初めてだ。自分でも不思議なくらいよく話せたなあ」と言ったことは、わたしたちの間に新しいかかわり合いが生まれるのではないかという希望を持たせるものであった。

この相談をしたことによって、Yについて新しい理解があったように思われるが、おもな点をあげると次のようなことである。

- (1) 攻撃的な行動の裏に内向性がかくされていること。
- (2) 物の見方が狭くて一方的なところがあるが、かなり一貫性のある考へを持っていること。
- (3) 進路や学習に大きな不安を持っており、これが不適応の一つの原因になっていること。

その後Yのようすは少しずつ変わってきたようであった。というよりも、Yの本来持っている別の面が、ためらいながら表面に出てこようとしているようであった。クラス対抗の球技大会があったとき、審判にミスがあったということで学校を代表して抗議をした。結局は認められなかったが、帰ってきて審判の言い分をみんなに説明して、自分達の思い違いであることを説得しようとしていたこともあった。

3学期になるとスキーに夢中であった。体育の成績はあまりよくなかったが、スキーは相当な腕前である。しかし、やはりスキー部に属するのはいやらしく、二、三の気の合った仲間と楽しんでいるようである。このころはYにとって比較的安定した時期であった。わたしもYに対して特別な気持を持たずに接していたように思われる。ただ、次のようなことがあった。2年の後半ともなると授業を理解できない生徒がふえてくる。数学などはことにそうである。そのような基礎的なところにつまずきのある生徒を対象として、週に1～2回特別講座を開くことになった。希望者が多かったので各学級5～6名の生徒を対象とすることになった。Yの学習に対する不安はかなり大きかったし、特に数学についてはさっぱりわからないとこぼしていたので、Yにも勧めてみた。ところが、Yは断固として拒否した。バカあつかいされるのはいやだというのである。わたしが勧めたこと自体に反発しているようにも感じられた。結局、問題のプリントだけを渡して家でやってくることにしてはどうかというと、それならよいと言う。しかし、最初の拒否反応のためかほとんどやらずに終わってしまった。この例は、Yの日常の行動に見られる背のびをする傾向をよく示すものである。みえや自尊心の裏にある劣等感がYの反発的な態度や行動をとらせているように思われる。

### 3 修学旅行（3年1学期）

3年生になるころから、Yの行動にまた不安定なものが感じられた。5～6人の男子の生徒といつも一緒に行動し、Yがそのリーダーらしい。特に問題となるような行動をするわけではないが、問題をはらんでいるように思われる。そこで、グループ相談を試みた。彼らにはグループとしての意識はまだないようであったが、いずれも学習不振に悩み、進路についての不安を持っているところが共通している。彼らはグループとして見られることに反発を示したが、やはり共通する不安からの避難場所としてのグループの性質が生まれつつあるように思われた。このグループは、それぞれの生徒と進路相談的な話しをしているうちに、いつとはなしに解消した。しかし、進路についての不安そのものが解消したわけではないので、逃避する場所のなくなった不安をどうするかという課題が残されている。

4月になって間もなく修学旅行があった。このころのYは何となく生彩が感じられなかった。修学旅行の2日目、Yは非常に不満そうであった。不愉快そうなようすで口をとがらせて歩いている。体の具合が悪いのかと聞くと、そうでもないらしい。“おもしろくない” “つまらない” “バカバカしい”などと、さかんに不平を言っている。グループの生徒ももてあましてはいるようすが見られた。ついに隊列から離れて、ふてくされたようすで歩いている。わたしは忙しくてYにはばかりかまけてもいられないし、他の生徒に対する配慮もあって、久しぶりに叱りつけてしまった。「君のそういう態度は、みんなにとっても不愉快なんだ。すこしは周囲の人の気持ちも考えてみるよ。」Yは、しばらくだまってうつむいていたが、やがて、バツの悪そうな笑いを浮かべて「すみません」というとみんなの後を追って走り出した。わたしは、Yの態度が予想と違って反抗的でなかったことにほっとしたが、後のことが心配であった。しかし、Yはその後何事もなかったようなようすで旅行を楽しんでいるようすであった。このことによって、かえって二人の間にあった遠慮のようなものがとれたような感じさえた。

#### 4 その後

修学旅行から帰って一か月ほどたったとき、Yが2年生を呼び出して説教をしたという知らせを受けた。Yを呼んで事情を聞くと「2年生が1年生に説教したので、その2年生を呼んで注意をした」のだという。しばらく話しているうちに、Yは自分のしたことが2年生のしたことと同じだということに気づいた。「こういうときには、どうすればいいのかなあ」と言う。多少の問題はあっても、集団生活に対する積極性への糸口になってくれることを、わたしは願った。

9月中旬運動会が行なわれた。学年を縦割にして、全校4チームに分かれて競技をするのだが、チーム対抗の応援練習や団体種目の練習に、最も熱気の盛り上がる行事である。このうちの一つのチームの団長にYが選ばれた。Yが2年生のときに応援団に所属していたことが買われたのであろうが、Yの内にあるそのような素質を生徒たちは認めていたのかも知れない。わたしにとっては、嬉しいことであると同時に不安でもあった。だが、Yは実に熱心にとり組んだ。応援歌をつくる。ふりつけをする。立てかんばんをつくる。昼休みや放課後には、200名近いチームの生徒を集めて応援の練習をする。このときには3年生に対しても遠慮なくしごいていた。運動会のふんいきは特別である。3年生もYの号令に従ってせいっぱい声をはりあげた。Yは準備が遅れているとあって心配し、応援歌の声が小さいとあって嘆きながらも生き生きとした表情であり、はりあいのある毎日であったようだ。

#### IV おわりに

この1年間をふり返っての心境は積み重なった疑問を前にした嘆息である。まず最も大きな疑問は、Yは望ましい方向に変容したのだろうかということである。Yはここに述べてきたような点を取り上げれば確かに変わってきたように思える。しかし、現実のYはやはり問題の多い生徒である。運動会が終わって1週間、Yは現在肩の荷を下ろしたような感じで一息ついているところである。だが、Yの最も重荷と感じている進路の問題が目前に立ちふさがっている。これに直面したとき、Yの性格の不安定性がどのような反応となって表われるか、わたしには予測がつかない。このおそれは、今までわたしのしてきたことが何であったかという疑問から発しているようである。この1年間、わたしは暗闇を手ざぐりして歩いてきたようである。はっきりした見通しを持たずに、ただいっしょに歩いてきただけである。あるいはじゃまになってさえいたのかも知れない。何かをしなければと思いながら何もなかったようにも思える。このように考えてきて、最も痛切に感じるのは、自分自身の変容の難しさと、とらえにくさである。わたし自身の変容が生徒の変容につながるものとすれば、この1年間は、はなはだ心細いものと言わなければならない。述懐はさておくとして、Yを含めた学級の生徒たちは、これから人生の一つの山場にさしかかるところである。共に変容することを今後の願いとするつもりである。